

## 恐るべし脳震盪

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

【「感動した」という声一方、「危険だ」との指摘も相次いだ。11月8日のフィギュアスケートグランプリシリーズ中国杯で、男子フリーの演技直前の6分間練習で羽生結弦は振り向きざまに中国選手とぶつかり倒れた。

付き添ったコーチは医師から脳震盪の有無を確認して、出場の許可が下りたが、「今はヒーローになる時ではない」と説得したが、羽生は譲らなかった。本番ではジャンプで5度転倒しながらも滑りきった。9日に帰国して精密検査を受けたが、脳には異常がなかった。【朝日新聞11月11日】より】

脳震盪とは、頭をぶついたり揺さぶられたりするなどの直接的な衝撃や、頭や脳へ伝わるような身体への間接的な衝撃によって、脳の神経細胞が圧迫されたり、引っ張られたり、ねじられたりして、その働きに異常が生じる外傷である。バスケットボールでもよく発生するケガである。私の弟は大学時代脳震盪を起こしながらプレーを続け、試合終了後記憶を失っていたことがあった。昔は平気でプレーしていたが今は武勇伝にはならない。

脳震盪受傷後は、脳に十分な回復期間を与えなければ、極めて重大な影響を残してしまう危険性がある。十分回復しないうちに再度脳震盪を起こすような衝撃を脳に与えると、硬膜下血腫などのより重症の頭部外傷を引き起こす(セカンドインパクトシンドローム)。後遺症が残る危険性が高く、最悪のケースでは死に至る可能性もある怖いケガなのだ。

どのような状態が危険な兆候か。以下の兆候が一つでも見られたら、すぐに救急車で病院へ行くべきである。選手の「大丈夫だ!」という言葉に甘んじてはいけない。

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| * 瞳孔が片方だけ大きい     | * 発作やけいれんがある       |
| * 強い眠気や起きることが困難  | * 人や場所が理解できなくなる    |
| * 頭痛の悪化、長期化      | * 混乱や落ち着きのなさの増加    |
| * 脱力感やしびれ、協調性の低下 | * 異常行動      * 意識消失 |
| * 繰り返される嘔吐や吐き気   | * ろれつが回らない         |

もっと詳しく知りたければ、『スポーツにおける脳震盪に関する国際会議』で作成された評価ツール『ポケットSCAT2』がある。ネットで簡単に手に入るのでコーチ達は常に身に付けたいものである。そして指導者が日常心がけることは下記の通り。

- ①選手をプレーから外す
- ②脳震盪の専門家(脳外科や脳神経外科)に評価をしてもらう
- ③選手の保護者に脳震盪について説明し、症状の観察のためにチェックリストを渡す
- ④受傷した日はプレーに戻さない

スポーツの世界も今や訴訟世界。ケガをした選手が大丈夫だと言っても決して無理して練習させたり、試合を続行させてはいけない。何事もなく美談で終わればラッキーだが、症状が悪化するケースが多い。その際に、試合や練習を続行させた指導者にかかる責任の重さは人生の重さを背負い込むくらいになることもある。

バスケットボールは人生を豊かにするツールである。バスケットボールと「運命」の出会いをし、学業、仕事との両立という「宿命」を背負い、優勝という「使命」感に燃えながら、人生の「本命」とする「命」がけの時もあるが、決して命を失うものではない。